

主体的な学習態度を育む教育課程改善の工夫

野田 敦 敬

(愛知教育大学生活科教育講座)

Improving of Elementary School Curriculum to Foster Students' Positive Attitude

Atsunori NODA

(Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

要約 主体的な学習態度を育成するには、従来の教育の在り方を見直し、学習指導と評価の改善を図ることが必要である。そこで、愛知県内の小学校と協同で研究を進めることで、より具体的な改善の方向について提案した。改善の具体的な視点は次の通りである。日課表の工夫、基礎・基本の定着の工夫、学習過程の工夫、異年齢集団による学習や生活、地域の人材活用の工夫、生活科及び総合的学習の特色ある実践、総合的学習と関連させた学校行事の工夫、新しい評価観と評価の在り方、少人数指導の工夫である。

キーワード：教育課程の改善、主体的学習態度、総合的学習

1 はじめに

平成14年度から新学習指導要領が全面実施される。「生きる力」の育成を目指した21世紀の新しい教育がいよいよ始まる。平成12・13年度の移行期には、様々な取り組みがされた。「総合的な学習の時間」の単元開発、評価規準の作成、基礎・基本の定着のための工夫、主体的な学習観を養う教育課程の見直しなどである。これらの取り組みについて、協同研究を行った愛知県内の9小学校の具体的な事例を基に、今後の学校の在り方について論じたい。

2 日課表の工夫

自ら学び自ら考える力を育成するため、授業改善を図るのは一つの方法に過ぎない。学校生活全体の改善を図る必要がある。また、特色ある学校作りと言いながら、学校内の施設の改善だけにとどまり、どの学校でも同じような日課表では、果たして特色ある学校作りと言えるであろうか。育てたい子どもの姿を明確にし、日課表を工夫することが大切である。以下にその具体例について述べる。

愛知県額田町立豊富小学校¹⁾は、平成11~13年度西三河地方教育事務協議会研究委嘱を受けて、「生き生きと自ら学び続ける子どもの育成をめざして—主体的な学びを育む授業及び教育課程運営の工夫と評価—」という研究テーマを掲げて研究に取り組んだ。

豊富小学校では、平成12年度から日課表の改善に取り組み、平成13年度は、平成12年度の見直しを基に表1に示した日課で学校生活を送っている。

表1 豊富小学校平成13年度日課表

8:15	朝のつどい (15分)
8:30	フレックスタイム1 (100分)
10:10	すこやかタイム (15分)
10:25	元気タイム (体力づくり・10分)
10:35	
10:40	フレックスタイム2 (100分)
12:20	ランチタイム (45分)
13:05	歯磨き・後かたづけ (5分)
13:10	
13:15	奉仕タイム (月・水・金) まかせてタイム (火・木) (15分)
13:30	のびのびタイム (20分)
13:50	
13:55	読書タイム (10分)
14:05	
14:10	フレックスタイム3 (100分) (帰りのつどいを含む)
16:00	

* 高学年の火曜・水曜・金曜日の例

〈工夫1〉フレックスタイムの導入とノーチャイムへの移行

授業と休み時間を合わせて100分（45分+10分+45分）を1ユニットとし、1日3ユニットを設定した。子どもの追究状況や学習内容により、1校時の授業時間を担任の裁量で自由に設定ができるようにした。また、自分で時計を見て判断し、自分で動くことのできる子どもの育成を目指しノーチャイムとした。この結果、休み時間が一斉ではなくなるが、休み時間は他のクラスに迷惑にならないように過ごすことを通して、思いやりの心を育むこともねらっている。

これまでの授業研究においては、教材の研究と指導法の研究は盛んに行われてきたが、授業時間は小学校では45分という枠組が暗黙の了解事項であった。しかし、あるまとまりの学習内容をこなすためには適正な時間があるはずである。45分という枠に学習内容を当てはめるのではなく、どのくらいの時間が必要なのかも授業を構成する視点に入れて考えるべきである。こうした観点からも、教師が学習内容や子どもの状況を見ながら、時間を自由に設定できる試みは価値ある試みである。自由に設定できるといっても、週案上では15分刻みで指導計画を立てるようになっており、闇雲に時間を使う訳ではない。

〈工夫2〉元気タイムの充実

健康で丈夫な体づくりと苦しいことにも立ち向かう心づくりを行う時間である。一人ひとりが目標をもって取り組み、自分に挑戦していく場としている。マラソンと縄跳びを季節に合わせて行っている。

〈工夫3〉奉仕タイムの充実

清掃の時間である。1年生から6年生までを28の縦割り班に分けて行う。「きれいにしよう」から「汚さないようにしよう」とする心を大切にしている。平成12年度は、この精神を実現するために1日おきの清掃になっていたが、午後の日課がでこぼこすることなどから、次の「まかせてタイム」と隔日とされた。

〈工夫4〉まかせてタイムの導入

各学級の分担の範囲ならどこを掃除してもよい時間である。すなわち、「ここはまかせてよ」と自らきれいにしたい場所を見つけ、清掃方法を考えて取り組んでほしいという願いが込められている。

〈工夫5〉読書タイムの充実

全校一斉に、教師も子どもの本に親しむ時間である。好きな本を自由に読むことができる。豊かな心を育み、心の栄養補給をする時間である。始業前に取り組む学校が多い中、豊富小学校では午後授業の前に位置づけている点に特徴がある。

* 「すこやかタイム」「のびのびタイム」は、休み時間である。

日課表を見ると盛りだくさんであるといった感がある。しかし、網羅的に位置づけられているのではなく、

左に示した5つの工夫は、いずれも主体的な学習態度を育てるという考え方が基になっており、学校生活全体で子どもを育てる考え方が浸透している。また、一般的に保護者の間では、まだまだ学校5日制への反対の声も根強いが、いかに5日間を充実していくかが、これらの反対の声に対応するにも重要なことであると考える。ぜひ、各学校の教育目標を具現化する日課表の工夫を期待したい。

3 基礎・基本の定着の工夫

基礎・基本のとらえ方は、様々であるがここでは、読み・書き・計算といった基礎的な事項の徹底を目指した取り組みについて述べる。

愛知県豊川市立御油小学校²⁾では、平成12年度から授業日の土曜日の1時間目を「国語」、2時間目を「算数」とし、全校で読み・書き・計算の力の定着を図っている。まず、各教科各学年50枚ずつ計300種類の自作プリントを職員室前にこれも自作の棚を作り、2教科合計600種類のプリントが置かれ、子どもが自由に自分の力にあったプリントを選び、一歩ずつ基礎の定着を図っている。

愛知県刈谷市立小垣江東小学校³⁾では、全校第1校時前の15分間「ドリルタイム」を位置づけ、漢字や計算やローマ字など繰り返しの学習により学習習慣を身に付け、基礎学力の定着を図っている。

愛知県一宮市立大和西小学校⁴⁾では、基本的な学習の流れ、話し方、聞き方、調べ方などの授業を行う上で必要な学習スキルを洗い出し、各学年の発達段階を考慮した一覧表を作成している。また、学習の基礎である計算や漢字を確実に習得させるために、「計算教室」などを学年を決めて、学年・全校TTで行っている。

また、多くの学校で朝のスピーチタイムを設け、人前で話したり、人の話を聞いて質問をしたりといった技能の育成を図っている。

これらの取り組みの枠だけで終わるのでなく、教科や総合的学習において、機会をとらえて、繰り返し学んだことが活用できる場面を設けることで、生きて使える力になっていくものとする。

4 学習過程の工夫（生活科・総合的学習）

主体的な学習態度を育てるために、学習過程の工夫が行われている。新しい教育課程の編成では、各学校の特色や地域の実態を考慮することが大切であるが、取り立てて地域の特色もなく、それまでの学校としての伝統もない場合、学習過程こそ、その学校の重要な特色となると考える。以下に数校の例を紹介する。

愛知県渥美町立福江小学校⁵⁾は、「思いやりのあるたくましい福江っ子」をテーマに実践研究に取り組んだ。学習過程を次のように設定している。

「つかむ」：自ら課題を見つけ、問題を見いだす。追究の見通しをもつ。

↓
「しらべる」：既習の知識や技能、考え方など、もてる力をフルに使い、問題を解決していく。

↓
「みがきあう」：他の学びを知り、自分の学びと比べながら、互いに考えを高め合う。

↓
「ひろめる」：学習の成果を他の学級や学年、家庭、地域へ伝える。

特徴は、「みがきあう」段階にあらう。ここに学級集団で学ぶ学校教育の大きな意義が感じられる。

次に、豊川市立御油小学校では、次のような学習過程を考え実践した。

「出会う」：対象にふれる。わくわくしながら、どきどきしながら、生活経験と結びつけながら、繰り返しかかわる中で、自分の課題を見つける。

↓
「つかむ」：対象にかかわる。やってみながら、気付いたことや思ったことをカードやノートにメモしながら、写真、絵や図形などに表しながら、活動の計画を立て、自分なりの目的をもって行動する。

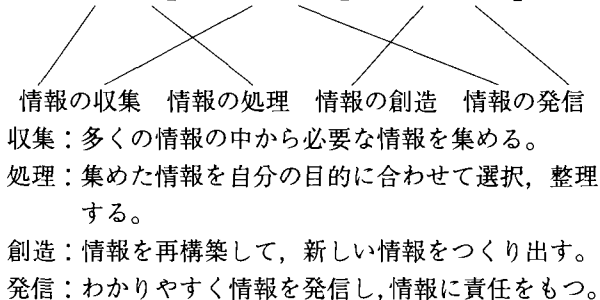
↓
「追究する」：対象にひたる。没頭しながら、調べ内容や方法をはっきりさせながら、追究する。

↓
「広げる」：対象を見つめる。自分の調べたことをまとめながら、自分の考えを知らせながら、自分の想いや考えが分かるように伝える。

特徴は、「出会う」「つかむ」の2段階を通して、じっくり対象への想いを練り上げ、活動の見通しをはっきりもつところである。

最後に、愛知県西尾市立八ツ面小学校⁶⁾では、情報活用を位置づけた学習過程として次のように考えた。

「つかむ」→「ふかめる」→「ひろめる」



特徴は、問題解決の過程を情報活用能力とからめながら考えている点である。

5 異年齢集団による学習や生活

少子化の影響により、子どもが、年齢の違った子どもたちと触れ合い、そのかわり方を体験的に学ぶ場が日常生活の中では少なくなっている。そこで、違った年齢の子どもと一緒に活動する機会を意図的に

位置づける試みが盛んになってきている。ペア学年による活動、縦割りによる活動と呼ばれるものである。

愛知県西尾市立中畑小学校⁷⁾では、春の矢作川遠足をペア学年で行っている。例えば、3年生と5年生のペア学年では、川でシジミを採って、シジミ汁を作る活動を行った。どこでシジミが採れるかの事前調査からペアでの活動が始まった。「あっ、あったよ。こっちにもいた」と歓声をあげ砂を掘ってはしゃぐ3年生、5年生は優しく手を引いてシジミの採れそうな場所まで連れて行く姿が見られた。

刈谷市立小畑江東小学校では、全校を赤・青・黄・白の4つの縦割り（ふれあいチーム）に分け、さらに各チームを4つの班（1班約10名）に分け、遠足、運動会、ふれあい東小祭り、カルタ会、なわとび大会などを行っている。ふれあい東小祭りでは、ふれあいチームごとに、教材園で取れた野菜を材料に加えて、野外でカレーライスを作り楽しく会食をする活動が恒例になっている。土曜日の午前に行い、保護者の協力も得ている。

名古屋市立橋小学校では、20年ほど前から縦割りで様々な活動を行っている。縦割りの特色としては、最小ユニットを4～9名の通学班としていることである。いくつかの通学班を合わせて25名程度の縦割り班をつくっている。日常的な活動としては、縦割り班での清掃である。朝一緒に登校した子どもたちが、掃除の時間にもう一度顔を合わせ、力を合わせて掃除をすることになる。日常的な活動であり、顔見知りのしかも住んでいる場所も近い子どもなので、一層結び付きが強まることになる。この縦割り班で、1学期は「星祭り集会」、2学期は「いもほり遠足」、3学期は「卒業生を送る会」を計画、実施している。

これらの学校では、その年齢なりの役割を果たすことができるようにお互いに支え合いながら活動が進められている。また、下学年の子どもは上学年の子どもにどのように接したらよいか、上学年の子どもは下学年の子どもにどのように接したらよいかを体験的に学んでいく。6年生になれば、ほとんどの子どもがリーダーやサブリーダーとなり、責任感が強まると共に、自己存在感を感じることができる。

6 地域の人材活用の工夫

主体的な学習態度を育成するには、教師だけの力では難しく、地域全体で子どもを育てていく必要がある。最近では、どこの学校でも呼び方は様々であるが、地域のゲストティチャーや保護者ボランティアを募っている。これらの人材を活用した学習は、本物から学ぶことで学習意欲が高まったり、保護者の付き添いにより子どもの思いに沿った学習が実現できたり効果は大きく、今後も充実に向けた取り組みが大切である。しかし、課題としては、これらの人々が活動中に何ら

かの事故に合ったときの保障の問題である。経費の必要なことでもあるので、各教育委員会での予算化をぜひ考えていく必要がある。

7 特色ある実践（生活科・総合的学習）

刈谷市立小垣江東小学校は、全校児童174名、各学年単学級の市内で一番の小規模校であるが校地は、市内で一番広い。この広い校地を活用して、環境緑化に取り組み、今年度は県内の緑化コンクールで特選に輝いた。

1・2年生は、生活科の年間指導計画で年間3回合同の授業を組んでいる。秋の単元「秋のおまつり広場をひらこう」（23時間扱い）では、そのほとんどを合同で行っている。しかし、いつも合同で授業をすれば効果があがるというものではない。別々に行った方が効果のあがる場所は学年ごとに行う。また、合同で活動する場合も、必ず学年の実態を踏まえて、ねらいを学年ごとに定めながら行っている。2年生が1年生を教えることで、自らの成長を実感し、自信を深める。1年生は、2年生と一緒に活動することで意欲的に活動できるといった効果がある。

5年生は、近くにある刈谷記念病院（療養型医療施設）に何度も足を運んで、訪問するごとに新たな問題をつかみ、次の訪問で解決できるように知恵を出し合い、お年寄りと楽しむことを考えた。5年生は24名である。これが大勢ならば、病院側も迷惑であろうが、いくつかの病室に分かれれば、ほんの数名ずつとなる。総婦長さんは、よきアドバザーである。総婦長さんに何度も話を伺いながら、子どもたちは知恵をしばった。その過程で、総婦長さんを始め看護にあたる方々の生き方にも子どもたちは触れることができた。小規模校のよさが実によく出ている。

西尾市立中畑小学校は、各学年2学級の学校である。伝統的に地域との結びつきが大変強い地域で、地域の方々も学校に大変協力的である。人・地域・自然との「ふれあい学習」を押し進めている。発達段階に合わせて、保育園児、家族、他校、地域の人々とのふれあいを柱に、生活科・総合的学習の単元開発を行った。

1年生は、隣接する保育園児と常に両者の学びを考えながら、1年を通して繰り返しふれあいの機会を設定している。3年生は、地域に伝わる「棒の手」を他校に伝えるために保存会の人々と触れ合った。まず、担任の二人の先生方が棒の手保存会の方々から棒の手を教わりに夕方何度も通った。この姿勢こそ総合的学習を考える上で大切である。研究発表会当日のアトラクションで、この二人の先生の実演も交えて棒の手が実演された。ここでも地域とのかかわりの深さが伺える。研究発表後のパネルディスカッションのパネラーの一人に前PTA会長で子どもたちには虫博士として知られている中根さんも登壇した。中根さんは、「子ど

もたちは、虫を見ると実にいい顔をするんですよ。そんな顔を見ていると私の心もほんわかしてくるんです」「『ほくも、おじさんみたいにやさしく教えてくれる人になりたいです』という言葉聞いて、この子どもたちは、虫だけでなくこの私までも見ていてくれたんだと思いました」「校区には、たくさんの町の先生がおみえです。子どもたちを通して、大人の輪も広がり、地域全体で子どもを見守る意識が広がっています」などと話した。図鑑やインターネットでも様々なことは分かるが、こうした地域の方々との心のやりとりこそ、生活科や総合的学習では大切にしたいものである。

西尾市立八ツ面小学校は、各学年3学級学校である。学校のすぐ裏には、八ツ面山という15～20分ほどで登ることができる小山がある。1年生は、生活科で「八ツ面山はわくわく山」という単元を各学期の核として位置づけ年間指導計画を作成している。八ツ面小学校では、地域を生かした学習を基盤としながら、情報活用能力を重視した単元開発を行った。コンピュータやデジタルカメラなどの機器の利用計画を各学年に位置づけている。研究の初年度当初は、コンピュータを持っている職員は、ほんの数名だったそうであるが、1年足らずでほとんどの職員が購入し使いこなしている。職員相互の教え合い、活用しながら身に付ける姿勢が重要である。子どもの情報活用能力の向上と共に、先生方の情報リテラシーの向上も目をみはるものがある。

8 学校行事の工夫（総合的学習と関連させて）

主体的な学習態度を育てるために、学校行事の工夫がなされている。例えば、学芸の行事である。学習発表会の時期を大別すると小学校では二つに分かれる。10月下旬から11月下旬に行う学校と1月下旬から2月中旬に行う学校である。それぞれに意味がある。

例えば、後半で行う学校としては、長野県伊那市立伊那小学校が有名である。伊那小学校は、毎年2月の第1日曜日に公開授業研究会を行っている。授業とその検討会が終わり昼食後に屋内運動場で2クラス程度の学習発表が計画されている。内容は、1年間取り組んだ総合学習の発表である。課題を見つける場面、追究している場面、問題に突き当たり困惑している場面、達成した喜びを分かち合う場面など、課題追究の道筋を、劇や歌、群読、俳句表現、ときにはTPでグラフを映し出し、説明をする場面もある。背景となる絵なども学年に応じた子どもらしい工夫があふれており、各教科等の学習の成果を生かしながら、しかも、その学級が取り組んだ総合学習がよく分かるように展開していく。演じている子どもにとっては、流れを考える段階から、1年間の総合学習を振り返り、学習の成果や達成感、成就感を味わう機会になっていると思う。ここには、学習発表会の原点があると感じる。

10月下旬～11月に行う学習発表会は、1年の学習では、中間点である。したがって、普段の学習の成果を総合的に生かし、その向上と意欲を高める機会である必要がある。学習発表の準備をすることが、それまでの学習の振り返りとなり、さらなる問題点が浮かび上がってきたり、次の課題も見えてきたりするであろう。そして、発表をすることでみんなに認められ励まされることで、次への活動意欲が高まるような場ではなくはない。

この夏休みに、数校の先生方と生活科及び総合的学習の2学期の実践計画について話し合った。いずれの学校も秋に学習発表会を計画していた。そこでの問題は、生活科及び総合的学習の計画が、「始めに学習発表会ありき」になってはいないかということである。例えば、学習発表会で、学年で祭りをやるから、その準備を生活科で行っていくように計画したり、学習発表会で英語劇をさせたいという教師の願いがあり、総合的学習で国際理解教育に取り組んだりといった展開である。総合的学習の新設で、ただでさえ多忙なおろ、一石二鳥の考え方も分からないではないが、本末転倒している。活動の中で、子どもの意識が盛り上がり、発表したいと感じたときに、本来は学習発表会を位置づけるべきであろう。したがって、全校一斉の形は基本的に無理がある。学年ごとに時期を違えて行ってはどうかという新しい提案も、この夏の先生方との話し合いで出てきた考えである。ぜひ、自然体での学習発表会を考えたい。

このほか、修学旅行等の泊を伴う行事においても、今まで教師主導の計画に子どもが沿って動く形が主であったが、子どもが主体的に取り組むことができる工夫が様々なされている。

愛知県弥富町立弥生小学校では、「自分のテーマをもって、本物にふれよう～修学旅行の計画を立てよう～」(全46時間)の実践を行った。以下に紹介する。

- ①「たんけん・なごや」を思い出そう (1時間)
 - ・自分が行った場所、調べたこと、心に残っていることを思い出す。
- ②京都ってどんなところ?
 - どこにある?何に載ってる? (1時間)
 - ・家にあるガイドブックや図書室の本で、京都についての概略を知る。
 - 手分けして調べよう (3時間)
 - ③みんなが調べたことを知りたい。京都情報バザールをしよう (情報交換)
 - 準備をしよう (2時間)
 - ・自分が集めたパンフレットや地図、簡単な掲示物等を用意し、それらについて簡単な説明ができるように準備する。
 - クラスでバザールをしよう (1時間)
 - ・クラスの中で、発表する側と聞く側に分かれ情報

交換する。興味をもった友達の資料はチェックをしておき、あとでコピーをもらうようにする。

- 学年でバザールをしよう (1時間)
 - ・規模を学年 (3クラス) に拡大して情報交換を行う。
- ④京都について調べるテーマを決めよう (2時間)
 - ・集めた情報をもとに、実際に京都へ出かけて確かめたり体験したりすることができるテーマを各自が決める。
- ⑤修学旅行での見学や体験の計画を立て、実際に出かけよう (23時間+行事6時間)
 - ・自分のテーマを追究していくためには、どこへ行けばよいかを考える。
 - ・似通ったテーマあるいは見学場所が近い子どもで小グループを作り、時間やルート、費用など詳しい行動計画を立てる。
 - ・京都で小グループでの分散学習をする。
- ⑥京都体験レポートをつくらう (4時間)
 - ・体験したこと、見学したこと、学習したことについて、写真や現地ですて入れた資料を活用しまとめる。
- ⑦発表会を開こう (8時間)

以上の実践を見たり聞いたりしたところから判断すると、子どもたちがこれまで学んできたことや日常的に身に付けた知恵を出し合い、自分たちで修学旅行を作り出していく様子がよく分かる。まさに「修学旅行」である。

9 新しい評価観と評価の在り方

平成12年12月に教育課程審議会が、「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」答申⁸⁾を出した。新しい評価の在り方について述べられている。これらにどのように対応するかが学校現場では切実な問題となっている。

しかし、評価というと通知表や指導要録へのどのように記入するかが最優先されているようである。それは、最終的なことであって、指導には評価がつきものであり、常に評価をしながら次の手だてを考え、学習を進めることが必要である。このような考えに立って評価を考えるべきである。当然、子供自身が自己評価をする場合もこの理念に立って進めるべきであり、主体的な学習を進めるには、子供自身が、この姿勢を身に付けることが重要である。「できた」「できなかった」といった結果を伝えるだけが評価ではない。例えば、生活科で秋の公園に子供を連れだした。いろいろ手を尽くしたが、意欲的に活動しようとしないうA児に、「関心・意欲・態度」の項目に△を付けたとしよう。これは、どのような意味をもつのか。A児が、秋の自然に関心を示して遊ぼうとしなかったことがいけないのか、それともA児が秋の自然に関心を示して遊ぶ環

境を整えられなかった教師に原因があるのか、どちらであろう。生活科の場合、1:4ぐらいで教師側に原因があると受け止めるべきではないか。そうすると、「生活科で△を付けるのは……」ということになる。しかし、客観的に判断して△は付けるべきである。「Aちゃんごめんね。今度は、Aちゃんが、関心をもって取り組めるような教材や手だてを先生も考えるから、頑張ろうね」といった気持ちを込めて△の評価を下すといった姿勢が大切である。評価をすることで、子供が自信を失ってしまっただけでは意味がない。評価をすることで、子供も教師もよりよい方向へ向かうことができるような心構えをもちたいものである。

さて、答申では、教科では、目標に準拠した観点別学習状況の評価（絶対評価）と一人一人のよさや可能性を伸ばす個人内評価の二つの柱が示されている。「総合的な学習の時間」の評価もこれに準ずることが述べられている。

まず、教科においては、文部科学省において作られ、今夏休みに各県・市に伝達された「内容のまとまりごとの観点別評価規準」を基にして、各学校で單元ごとの観点別評価規準を作成することである。今回は、観点別内容のまとまりごとの評価規準のほかに、観点別評価規準の具体的な内容例を付け、評価規準を作りやすくしている。

さて、従来の「評価基準」と今回答申で述べられた「評価規準」という考え方は、どこがどのように違うのであろうか。「評価基準」の考え方では、A・B・Cの3段階の基準を設け、それを尺度として、子どもの学習の様子から、A・B・Cにランク付けをしていくような評価に陥りがちであり、評価のための評価といった観があった。今回の答申では、指導と評価の一体化が強調されている。また、学習指導要領解説総則編総説⁹⁾には、「基礎・基本の徹底」が述べられている。これらのことから「評価規準」の考え方は、学習指導要領の内容を基におおむね満足のレベルで観点別に評価規準を作成する。その規準を基にして、子どもの学習の様子を見ていく。まず全体を見わたし、規準に達していない子どもをとらえ、規準に達するように指導を工夫する。また、規準に達している子どもには、さらに伸びるような指導を工夫する。これが、指導と評価の一体化であり、基礎・基本の徹底につながることになる。

次に、総合的な学習の評価である。教科と同じように観点別評価規準を作成する必要がある。教科は、評価の観点を国が定めているが、総合的な学習では、ここから各学校で進めなければならない。文部科学省では例として、「課題設定の能力」「問題解決の能力」「学び方、ものの考え方」「学習への主体的、創造的な態度」「自己の生き方」「学習活動への関心・意欲・態度」「総合的な思考・判断」「学習活動にかかわる技能・表

現」「知識を応用し総合する能力」「コミュニケーション能力」「情報活用能力」をあげている。各学校では、これらを参考にしながら、各学校での今までの総合的な学習の実践を基にして、総合的な学習で子供にどのような資質や能力、態度が育っているか、あるいは育てていこうとするのか、いわゆる総合的な学習の目標を決め、それを支える3・4の観点を定める必要がある。そして、各学年、各単元での観点別の評価規準を定め、「何を」「いつ」「どのような方法で」評価するのかを含めて、学習展開を考えていく必要がある。

また、総合的な学習の評価と言えば、「ポートフォリオ」と言う言葉が聞こえてくる。これも、この評価方法を通して、何を評価し指導に生かすのかをはっきりさせておかないと、単に学習記録や資料を集め、選択し、振り返っても機能しない。例えば、学習への満足感や成就感を評価しようと考えたならば、それなりの学習シートの作り方をしなければならぬし、教師の朱書きもその方向でされるべきである。

10 少人数指導の工夫

ゆきとどいた教育を進めるために、少人数による指導の工夫が徐々に始められている。名古屋市は、平成13年度は、各区に1校、小学校1年生で「30人学級」を試行し大きな成果を上げている。平成14年度からは、さらにこの枠を拡大していく方向で検討を進めている。また、平成12年度より第7次教職員定数改善計画の一環として、愛知県下には225人の少人数指導授業対応教員が配置されている。

少人数指導の工夫については、平成13年11月3日に開催された第51次教育研究愛知県集會（主催：愛知県教員組合、後援：豊かな教育を創造する県民会議）の教育条件整備の分科会においても数例が報告され、研究協議が行われた。

例えば、名古屋市立天子田小学校では、3年生から6年生までの算数で少人数指導を行っている。例えば6年生は2クラス66名であるが、算数の授業は、担任2人に少人数担当教師が加わり、22名の3クラスで指導が行われている。次のような成果が上がっている。

〈子どもたちへのアンケート調査から〉

- ・少人数だとはずかしくなく、手が挙げられたのでよかった。
- ・少人数になって、わからないところがあるとはっきり「わからない」といえるからよかった。
- ・人数が少ないから、先生を呼んだらすぐに来てくれるので分かりやすい。
- ・文章題が苦手だったけれど少しは好きになれた。
- ・手を挙げるとたくさん当ててもらえる。

次に、名古屋市立日比津中学校では、1学級を二つに分けて少人数指導を行っている。生徒の習熟の差が生じやすく、きめ細かな指導を必要とする数学、理科、

英語科で行っている。特に、英語科では、講座別学習をとっており、生徒の希望により、1学期は「音読中心」と「読み取り中心」の2講座、2学期は「基礎を学ぼう・ステップアップコース」と「発展・チャレンジコース」の2講座を行っている。

〈教師へのアンケート調査から〉

- ・発表しやすい雰囲気作りができ、積極的に取り組む生徒が増えた。
- ・声を掛けやすく、また、一人一人の顔をよりしっかり見て授業が行えた。
- ・生徒が自分のやりたい内容を選択できたため、意欲的に学習に取り組んでいた。

以上のような成果が上がっている。基礎学力の定着と発展的学習の充実のために今後より一層の取り組みが期待できる。また、多くの少人数指導担当の教師が配置できる予算化を国が図るべきである。

11 終わりに

平成14年4月からいよいよ21世紀の新しい学習指導要領に基づいた教育が本格実施される。ここでは、移行期に愛知県内における主体的な学習態度を育成する様々な取り組みを紹介しながら、新しい方向性について論じてきた。明治維新、第2次世界大戦後に続く第3の大きな教育改革を実り多いものにするには、発想を転換し、いかに子どもの立場に立った学校運営、授業設計をしてかが重要であることをここに紹介した多くの研究成果から読みとることができる。

最後に、本文で紹介した9校の協同研究校の皆様に深く感謝いたします。

【参考文献】

- 1) 額田町立豊富小学校「生き生きと自ら学び続ける子どもの育成を目指して－主体的な学びを育む授業及び教育課程運営の工夫と評価－」平成13年度研究紀要
- 2) 豊川市立御油小学校「自分の想いを豊かに表現する総合的学習」平成12年度研究紀要
- 3) 刈谷市立小垣江東小学校「ひと・もの・自然とふれあい、自ら活動する子どもの育成」平成13年度研究紀要
- 4) 一宮市立大和西小学校「総合的な学習 共に生きる」平成13年度研究紀要
- 5) 渥美町立福江小学校「思いやりのあるたくましい福江っ子－いのちを大切に作る心が育つ総合的な学習－」平成12年度研究紀要
- 6) 西尾市立八ツ面小学校「自ら学び、自ら考える子の育成－情報活用能力を重視した生活科・きらきら学習の実践を通して－」平成13年度研究紀要
- 7) 西尾市立中畑小学校「共に生き、共に学びあう中畑っ子の育成－人・地域・自然との『ふれあい

学習』を通して－」平成13年度研究紀要

- 8) 教育課程審議会「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）」平成12年12月
- 9) 「小学校学習指導要領解説総則編」文部省 平成11年5月